

持続可能な「地域と若者の共創による地域自治」支援事業

～地域自治 2.0 を目指して～

■取組の概要、経緯

ソンリッサは、群馬県において高齢者の孤立・孤独の予防対策を行っています。高齢化率の高い前橋市の大利根地区等がその対象地域です。担い手の若者が、居場所・相談支援や御用聞き事業などを行っています。ソンリッサは自分の想いと地域課題をつなげて地域福祉活動に取り組む若者「まごマネージャー」育成事業を開始しました。24年度に入り、「自治会」との提携を開始しました。地域の共助システムとして重要で、自治体への政策提言も効果的な行政単位と考えているからです。「まごマネージャー」が集い、持続可能な「自治会」にするための再編成（地域自治 2.0 構想）も開始、高齢者の孤立・孤独防止の広域展開へのモデルケースを作ります。

■基本情報

○官民連携事例

○取組の実施機関：特定非営利活動法人ソンリッサ

・対象地域：前橋市

・連携の実施機関：

群馬県介護高齢課（認定孫マネージャー育成研修）、

前橋市長寿包括ケア課（居場所事業の補助・生活支援体制整備事業）、

前橋市地域包括支援センター東（生活支援体制整備事業、サービス連携）、

前橋市社会福祉協議会、前橋市大利根町自治会、総社町新田自治会、

元総社町 10 区自治会、民生委員、介護予防サポーター、群馬医療福祉大学、

高崎健康福祉大学高等学校（学生のインターンシップ連携）、

群馬県内の大学、専門学校、高校等

○対象者のライフステージ区分：

高校生、大学生、若年層（中卒・学業中退者 18 歳～34 歳）、中年層（35 歳～64 歳）、
高齢層（65 歳）

○URL：<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000003.000106331.html>

■課題や苦労した点

「まごマネージャー」育成事業にあたり、若者の発掘や、多様な社会資源との連携で人材育成のプログラム構築には労力が掛かりました。24年度より「自治会」に向けたサービスも進めており、自治会とソンリッサの協働を開始しました。若者との交流にあまり前例がないことから、自治会と若者の価値観のズレを修正することや、重要な課題の見極めなど意思疎通を図ることに苦労しています。

■取り組みの効果

年間 10 回の育成講座で、7 名の「まごマネージャー」認定者が生まれました。ルーブリック評価で事業検証（効果）し、研修前後で、参加者全員がプラス評価でした。24 年度は、内容の改良と自治会での現場研修も加えます。自治会との協働では、若者の参加により、オンラインによる交流・回覧板の提供などができました。「地域自治 2.0 構想」に向けて再現性あるモデルとして展開したいと考えています。

■取材をして

単身世帯が増加し、人と人とのつながりの希薄化が叫ばれて久しいですが、特に高齢者の孤独・孤立の問題は深刻です。

NPO 法人ソソリッサは、主に群馬県前橋市を中心に、高齢者の孤独・孤立対策の取り組みをおこなっています。介護保険などの制度化された事業ではなく、そのもっと手前の日常的な生活のサポートや、サロン、居場所づくりなど、その活動は多岐にわたります。また、単にサービスを提供する、される、といった関係ではなく、地域の若者たちとともに自治会などの地域組織へ積極的に関わっていくことを通じてその活性化を図り、地域の「自治」の在り方について、現場からの変革を目指して活動しています。

団体の成り立ちや活動、官民連携、民民連携の工夫や成果について、理事長の萩原さんにお話をうかがいました。

【インタビュー】

大西：萩原さん、本日はよろしくお願ひします。まずは、団体の成り立ちや背景について教えてください。

萩原さん：ありがとうございます。もともと、原体験というか、僕自身がおばあちゃんっ子だったんですね。僕は群馬の田舎の出身だったんですが、自転車で行ける距離に祖父母宅があり、家で嫌なことがあったら遊びに行ったり、居場所というか今で言う安全基地みたいなものだったんです。

それが、中高生の時に、会社を営んでいた祖父が亡くなり会社の清算することになり。祖母が独り暮らしになったんです。もともとは元気な人だったのに、みるみるうちに活力がなくなっているように見えました。家のなかが暗くて、一人でボーっとしている。縁側からのぞいても元気がない。もちろん、家事ができなくなったりなどの生活課題があるわけではなくて、ただ、気力がなくなっているというか。

大西：それは心配ですよ。

萩原さん：ですね。でも、例えば、ゴミ屋敷になってる、とか、生活困窮だ、とか何らかの課題があれば支援が入るじゃないですか。祖母はそうではなくて、自分のことは

自分できちっとできていて。支援が入るような状態じゃない。ただ、「ひとりぼっち」。そんな状況があるのを間近でみて、けっこうショックを受けたんです。

大西：地域の方との接点もなくなってしまっていたんですか？

萩原さん：そうですね。もともと、地域のつながりが残っていたところで、僕も近所のおじいちゃん、おばあちゃんたちに可愛がってもらっていました。将棋クラブに入っていて一緒に将棋したり。僕以外はメンバーはみな高齢者でしたが笑

そういった地域だったのですが、いざ閉じこもってしまうと、もちろん、民生委員さんなどが月に1回訪問してくれて声をかけてくれたりするのですが、本当にそのくらい。祖母自体も迷惑かけたくない、と思って我慢していたのかもしれませんが、外との接点がなくなった感じだったんです。

大西：いわゆる「支援」のもうちょっと「手前」みたいなところの必要性に直面した、ということですね。

萩原さん：ちょうど、そのころ NHK で「無縁社会」という特集をやっていて、まさに自分の祖母の状況と重なりました。支援の狭間というか、対象になっていないけれども、しんどい状況の人がいるなど。

高校生の頃に東日本大震災があり、NPO や社会的起業などを知りました。この問題について何かできることをしていきたいと考えるようになりました。

大西：それで NPO 法人ソソリッサを立ち上げたんですか？

萩原さん：最初は就職したんですが、やっぱり、地域に関わりたい、特にこの高齢者の孤立の問題に取り組みたいと思ひまして、仕事を辞めて、地域おこし協力隊に応募しました。

大西：地域おこし協力隊ではどんなことをしたんですか？

萩原さん：群馬県甘楽町に移住しました。甘楽町は、人口1万3千人ほどのちいさな町。高齢化率も高く、限界集落と呼ばれるような地域もありました。高齢者の孤立の問題に取り組みたいと思って応募したものの、最初は何をやっていいかわからず。ひたすら知り合った人、主に高齢者ですが、おうちに訪問して困っていることがないか聞いたり御用聞きといたしますか、ちょっとした買い物を手伝うとか、お掃除を手伝うとか、そんなことをしていました。また、グランドゴルフを一緒にやったり、サロンやお茶会に出席したり、できることは全部やろうと思ひましたね。まず、顔を知ってもらって、高齢者の方がどんな暮らしをしているのか、どんな困りごとがあるのか、地域の

課題は何なのかなど、まっさらな気持ちで理解したかったんです。

大西：そこではどんな収穫がありましたか？

萩原さん：保健師さんに同行して、ある方のおうちに訪問した時に、その方はもともと知り合いだったのですが、僕と話す時とは全然雰囲気違ったんですね。僕には「〇〇で困ってる」とか話していたのに、一切言わない。プライドなのか我慢しているのか、本音を言っていないことに驚いたんです。僕とはコタツに入ってタクアンつなみながら話していたのに。

大西：役所の人や専門職の人などを前にすると委縮したり恐縮してしまうことってありますよね。

萩原さん：そうなんです。いろいろ聞いていた内容がきちんと共有されないなど。でもこれってある意味当然かもしれない。本音で話せるって簡単ではないし、いきなり相談ってハードルが高いですよ。でも、その本音が大事だったりする。役所や専門職とも違う立ち位置で関係構築することができれば、本音が聞けて、その本音をもとに支援や地域づくりをしていけば、みんなにとって住みやすい地域になるんじゃないか、そんなことを考えました。

大西：それで団体を立ち上げた。

萩原さん：はい。地域おこし協力隊の途中で NPO 法人ソソリッサを立ち上げました。地域おこし協力隊時代に行っていた訪問や御用聞きのようなちょっとした生活のお手伝いなどを、僕一人ではなく、チームとして行っていくことを考えました。

大西：ソソリッサではどんな事業を行っているのですか？

萩原さん：大きく4つの事業を行っています。1つ目は、高齢者への訪問と御用聞きのような制度の手前のちょっとした日常の困りごとへのサポートです。年間で100件ほどおこなっています。

2つ目は、サロンの実施です。高齢者のみならず、高校生や大学生、社会人の若者なども参加しています。高齢者のみのサロンにするのではなく多世代、特に若い世代の人たちが一緒に関わっていくことを大事にしています。関わってくれる若者は400名近くになります。

3つ目は、居場所の活動です。団地の真ん中に拠点をかまえて、誰でも集える居場所を作っていました。実は諸事情があり現在は休止中です。サロンと居場所とを合わせると1000名ほどの高齢者の方が参加しています。

4 つ目は、人材育成として若者向けの「マゴマネージャー」というものを養成する事業をおこなっています。

大西：3 つ目の「居場所」がいま休止中なのは何か理由があるのですか？

萩原さん：はい。まさに、団地の真ん中で居場所を中心にチームでおこなっていたのですが、制度の手前って制度外のことですよ。けっこう、やりだすとエンドレスでいろいろあるんです。これも手伝ってほしい、あれも必要だ、など。もちろん、どれも重要なのですが、僕たちは、住民の人たちとみんなでいろいろなことをやりたいんですね。困ったことはソマリッサにお任せ、みたいになってしまうとそれは違うかなと。ソマリッサが足りない部分を補完する、みたいなそんな状態になってしまっているのではないかと。サービスを提供する、される、という関係をこえて、支え合いの機能を強化していく、みんなで支え合うかたちを考えていくにはやり方を変えなければならぬ、と考える一旦立ち止まりありたい関係性を改めて考えていくために休止にしました。

大西：サービス提供なのか、相互扶助なのか、支援なのか被支援なのか、地域づくりでは非常に難しいバランスになりますよね。

萩原さん：そうですね。特にコロナ禍があって、状況は大きく変わったと思っています。

大西：コロナ禍で地域の力が弱くなった、とよく聞きますね。

萩原さん：コロナ禍で、お祭りが中止になったり、地域のサークルや婦人会、子ども会のイベントなど、軒並みなくなりましたよね。そもそも住民同士が集まったり何かを一緒にする、という機会自体が大きく減少しました。しかも、それが2年以上続き、解散したものもあれば、うまく引き継がれずに空白が生まれ、あらたに担い手になってもノウハウがない、みたいな状況もあります。

大西：そこに「担い手」として認識されてしまった部分もあると。

萩原さん：そうです。でも、僕たちがしたかったのは、担い手になってサービスを提供することではないんです。

大西：まちづくり、地域づくり、ですね。

萩原さん：もっと踏み込んで言うと、「自治」の話なんですよ。地域のことは行政にお任せ、支援は専門職にお任せ、ではなく、この地域をどうしていきたいのか、みんな

なで一緒に考えていきたい。地域はどうあるべきなのか、住民主体で一緒に作り上げていきたいですね。なので、自治会長さん20人くらいにインタビューして課題を聞いたり、行政や社協とも協力して自治会自体への参加やその在り方のアップデートもおこなっています。

大西：いま、行政や社協の話もできましたが、どのような連携や協働をおこなっていますか？

萩原さん：もともと、団体の立ち上げの時から、行政や社協、自治会などとは連携してきました。右も左もわからないなかで団体を立ち上げたので、とにかくいろいろな人に聞きまくったんですね。制度のことでわからないことがあれば役所に、福祉関係のことでわからなければ社協に、地域のことでわからなければ自治会に。それこそ、地域おこし協力隊の時は誰も知り合いがないなかでの活動でしたから、とにかく聞きまくる、会いに行き行って教えてもらう、をしていました。

大西：顔が見える関係を地で行ってるんですね笑

萩原さん：今は、地域のお祭りに行くとみんなに話しかけられます笑

大西：行政との関係構築はうまくいっていますか？

萩原さん：群馬県が現在、若い世代との交流による高齢者の孤独・孤立対策事業という事業を始めていて受託しています。まさに多世代での取り組みで、県内の大学や高校と連携し、地域の高齢者や自治会などに参加できるような機会をつくっています。県の事業になったこともあり、認知度もあがり、関心をもつ自治会や地域も県内で増えてきています。

大西：成果が上がっているということですね。

萩原さん：とはいえ、まだまだ課題が多いのが正直なところです。自治会と聞いて、良いイメージをもたない方も地域にたくさんいます。若い方や女性にもたくさんいます。

大西：古い体質というか、縦社会というか。年配の方や男性が中心のイメージがありますね。

萩原さん：まさにそれです。多世代といっても、若者を労働力として、饗応役として送り込むことをしたいわけではないですね。対等な関係で世代をこえて、地域のことを一緒に考えて、まちづくりを一緒にしていきたいんです。

大西：自治会など既存の枠組みの意識が変わっていくことも大事。

萩原さん：正直、なかなか大変なのですが、まさにワークショップや車座対話などを企画して、自治会自体を現代的にアップグレードするべく変化を促しています。今までのやり方で参加できなかった、しなかった方も、新しいかたちになれば戻ってきてもくれるかもしれない。また、変化をしていかなければ時代に取り残されてしまう、そういった危機感を持っています。

また、誰かがやってくれる、サービスとしてではなく、相互扶助、支え合いの精神という文化をどう作り上げていくのかも、世代や立場、これまでの関係性をこえて取り組んでいく必要があると思っています。

大西：それで、地域自治 2.0 なんですネ。

萩原さん：まだ小さなチャレンジですが、少しずつ広げていきたいです。

大西：お忙しい中、インタビューに応じていただき、ありがとうございました！



【インタビューを終えて】

地域社会や地域コミュニティーをどう再生していくのか、という論点については、さまざまな政策分野で議論されています。孤独・孤立の文脈においても、地域の「つながり」がとても重要です。しかし、それをどう作り上げていくのかの際に、これまでの地域の「つながり」が持っていた「良い部分」と「良くなかった部分」を丁寧に分析していくことが求められるでしょう。

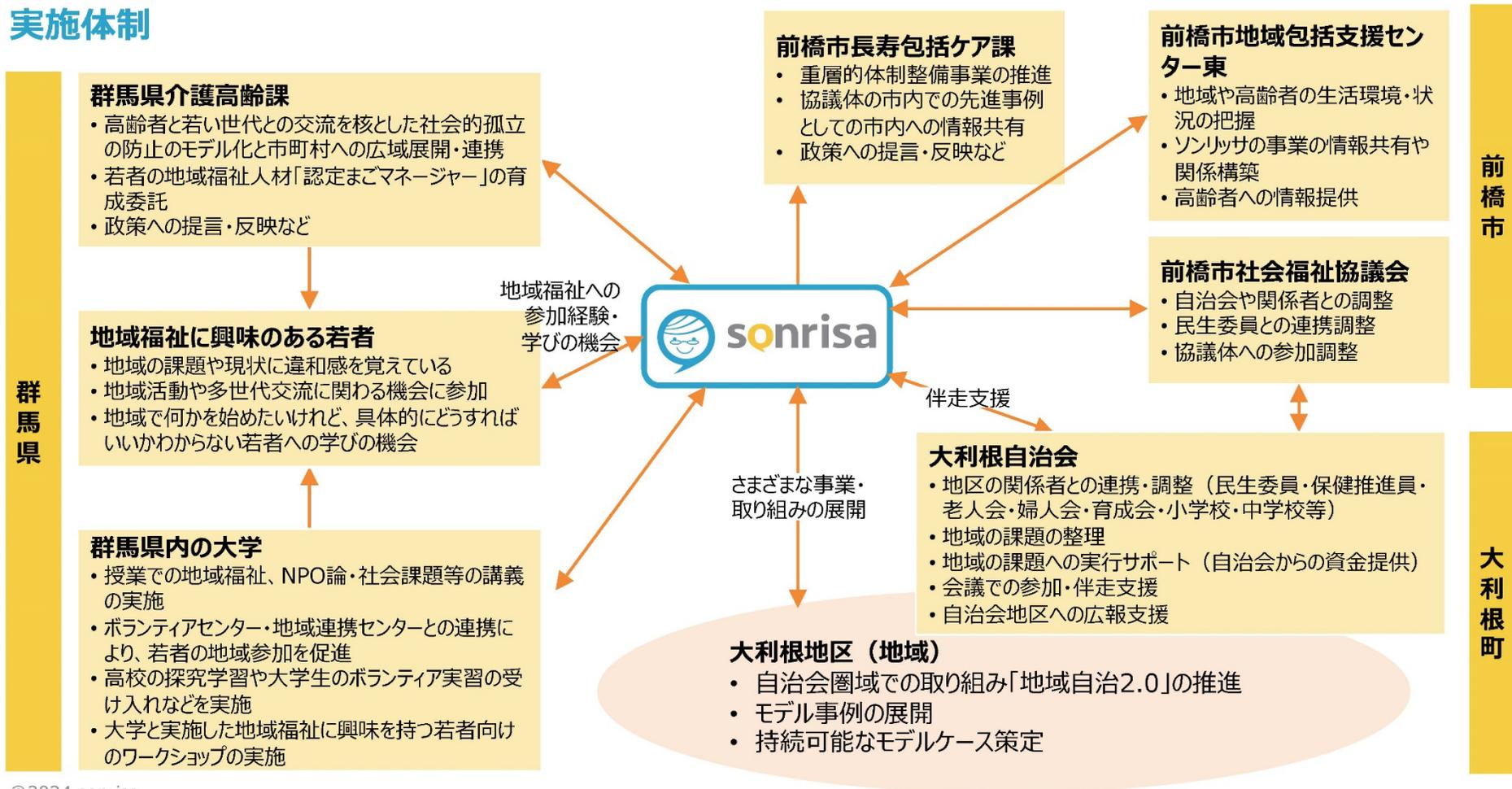
地域自治2.0という言葉が出てきましたが、現代的にどうアップグレードしていくことができるか、その変化を恐れずに地域が受け入れることができるのか。地域のこれからの取り組みのヒントを得られたのではないかと思います。

連携・協力についても、萩原さんはナチュラルに「わからないことを聞きに行く」「気になったら会いに行く」とお話しされていて、ある種の究極の「顔が見える関係」を示唆してくれたのではないのでしょうか。

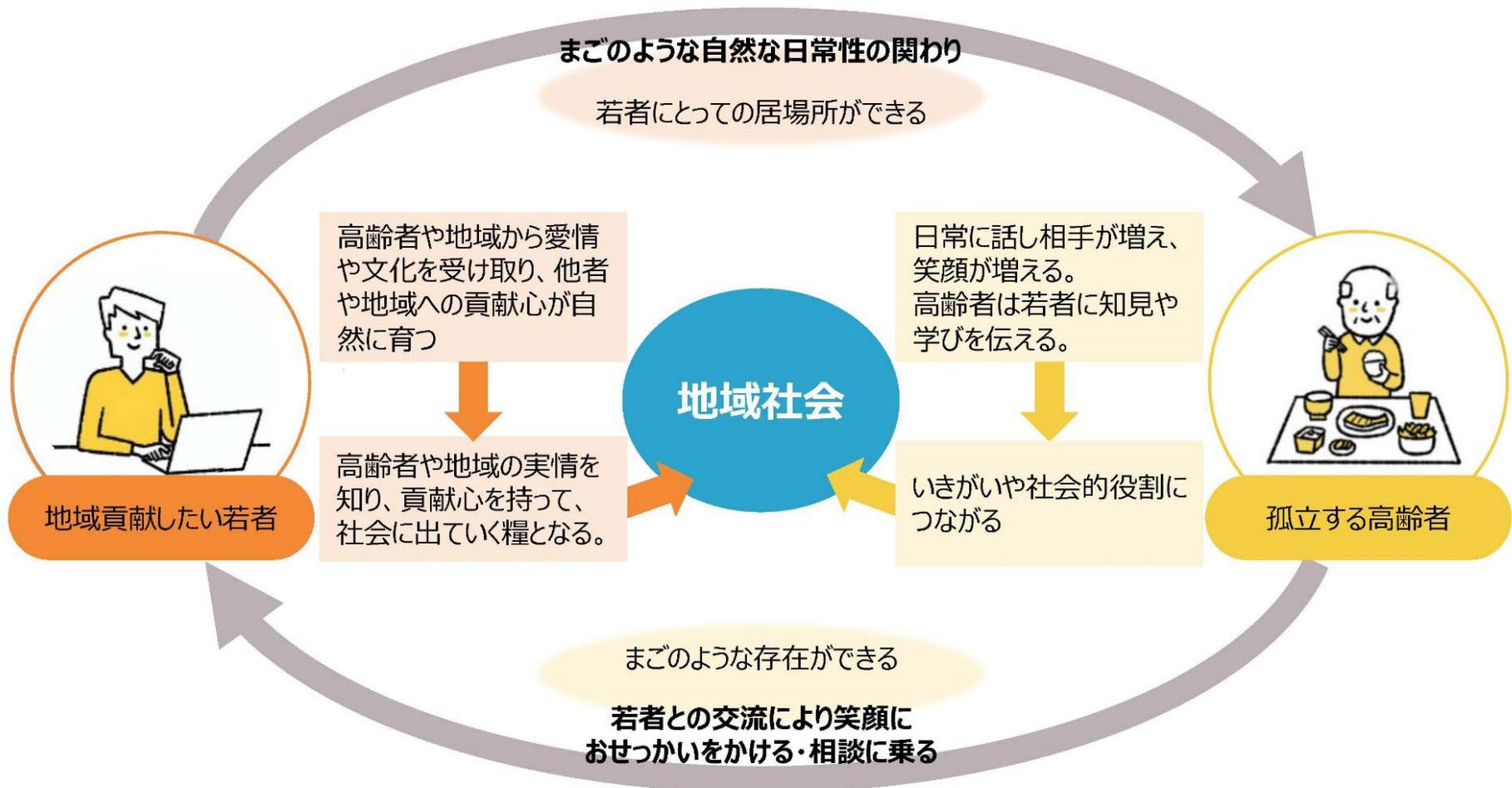
(取材者 大西連)

地域と若者の共創による持続可能な地域自治支援事業

実施体制



なぜ、地域の中へ若者の取り込みが有効なのか



経験やコミット度に適した形で若者が地域と関わる機会を醸成

地域福祉に関わる若者へのアプローチ

